

昭和二十四年七月二十三日  
 昭和五十五年四月十五日  
 第三種郵便物認可  
 発行(毎月一回・十五日発行)

(通第三七〇号)

# 慈光

第三十二卷 第四号

## 次

他力信仰の妙趣……………	近角常観……………	(1)
信を行く旅人抄……………	池山榮吉……………	(4)
① 一 道会 <small>63.9.5</small> の記……………	榊原徳草……………	(7)
去りにしものは哀しきかな……………	川畑愛義……………	(12)
自照日誌抄(20)……………	西元宗助……………	(16)
念仏詩抄……………	木村無相……………	(19)
本願に生かされて……………	花田正夫……………	(22)

# 他力信仰の妙趣

## 近 角 常 観

信仰のこともあまりむつかしく考えるの極、平凡の人の企て及ぶべからざる様に誤解される傾きがある。信仰は決してえらいことではない、人間として必ずなければならぬものであるが、また何人も容易に得られるものである。信仰といえは偉人傑士の事業であるかの如く思うのは大きな誤である。一文不通のものが如来廻向の一つによりて、たちまちに信心を獲得出来るのである。しかも不思議なことには如何なる愚痴な人でも信樂開發の一念にただちに大勝解の人となるのである。俗に云えば大いに分った人となるのである、要領を得る人となるのである、これは事実である、不思議というより外に申しようがない。

そこで何人もその信樂開發の一念に達したいと求めるのである、それなのに夫が如来廻向であるから、此方から求めるのではない。こちらから求めて得るのであれば自力廻向である。それではどうしたらよいかと云えば外ではない、聞其名号じや、觀仏本願じや、要するに如来の御思召を

きくに限る、決してむつかしいことではない。

如来の御思と云うは外のことではない、我等罪業深重の衆生、いたずらに煩悶懊惱して善をなさねばならぬと知っていても、それを為すことが出来ず、悪を為してはいかぬと承知しながら悪を為し、自ら苦しみながら煩惱を起し、たのむべからざる夢の如き人生を頼みとし、生死海中に流転しつづつある有様をみそなわして、深き大悲の御心より憐愍矜哀の思いやるせなく、よく我等の根機性分を知ろしめして、如何にも可愛想に思召され、普通の法によつては助かることの出来ない点をご存知ありて、それを助けんとある思召が超世の本願ということである。この点に深く注意して聞かねばならぬ。何れの法にても、何れの行にても助からぬものを助けんという点が有りがたいのである。

人間は善を為さねばならぬ、悪を為してはならぬということとは誰もよく承知して居ることである。その通り出来さえずれば人生問題の解決は容易である。人は生を願ひ死を

嫌う、もしその通り出来れば人生の煩悶はない。しかるにその善が出来ない、悪が止められない、生が得られず、死がまぬかれぬ、ここに種々の形を以て百般の人生問題が起つて来るのである。それなら善が出来ずともよい、悪を為してもよい、生きても死してもよいではないかと云われても、そうは承知出来ぬ。出来ぬ善をしたい、止められぬ悪を止めたい、生は得たい、死は避けたいと願いながら一つとして望む通りに出来ない、この如く我等は正しき道と煩惱の間にはさまつて何とも致し方がない、ここにおいてそのいたしかたなき我等を憐愍したまうがそもそも大悲大願の淵源である、出発点である。

何人も仏とは如何という疑問を提出するものであるが、我等と無関係な仏を信することは出来ぬ。ことに阿弥陀如来という御仏は、もし超世の願がなかったならばあらわれ下さらぬのである。きりつめて云えば我等が果して理想的に実行することが出来たならば、阿弥陀如来は顕現したわなんだのである。阿弥陀如来という全体が、この様に煩惱をもって苦しみつづつある我等を見捨てたまうことが出来ぬ大悲心が本となつて、超世の本願即ち普通で助からぬ者をたすけんとの選択本願を建てたまうたのである。そして成就されたのが即ち念仏である。かくして正覚を感じたまひし御仏が阿弥陀如来である。故に本願は阿弥陀如来のあら

われたまう根元にして、また今現在に我等を招喚したまう如来の思召である。即ち我等が罪惡深重のために五幼思惟のご苦勞を為して下されたのである。而して十劫已來わが親がわからぬか、わからぬかと呼びたまう勅命が本願である。

このやるせなき誓願をきかば何人も信ぜずには居られぬ、不思議と叫ばざるを得ぬ、かくまでも私一人のために御苦勞下されたかといただかかねばならぬ。善をしたい、そして出来ぬ、為せと命ぜられても致方なく、出来ずともよいと言われても、可いとは横着になれぬ。しかるに仏かねてしろしめて、私の出来ない点を憐みたまいて、その者をたすけんとて永劫の御苦勞をして下されて、今現に阿弥陀仏となりて我を待ちかねたまうをきけば、いかでか大慈大悲をいただかずに居られよう、聞其名号信心歡喜のその一念に親心をいただくのである。

若不生者のちかひゆえ 信樂まことにときいたり  
一念慶喜するひとは 往生かならずさだまりぬ  
といは実にこの点である。法然上人より親鸞聖人への附屬の文に、

「彼仏今現在に成仏したまへり、当に知るべし、本誓重願むなしからず、衆生称念すれば必ず往生を得るなり」とある。実にこの親心をきいて信樂開發する一念の心得

である。

そこでこの一念をもって直に至心に廻向したまえりと仰せられた。実にこの一念は如来が我等に廻向したまうたのである。これが始めに申した通り如来廻向の一つによって信心獲得が出来るということである。信巻及び略文類に、薄地の凡夫、底下の群生、無上妙果の成じかたきにあらず、真実の信樂實に得ること難し、いまし如来の加威力によるが故に、広く大悲広慧力によるが故に。とある。如来廻向によらずして信心を得んとするからである。しかるに信樂を獲得のは外でもない、如来の加威力によるのである、如来より直々に威神力を加えたまうのである。曇鸞大師が天親菩薩の一心を釈して、如来威神を加えたまうにあらずんば、はた何を以てか達せん、この故に仰いで告ぐ、と申されたのもこれである。信巻に往相の一心を發起すと申されたのもこれである、実にこれ仏智他方のおさずけである。



# 信を行く旅人抄

衆生かわいや 生死の海に  
おのが罪から うきしずみ

久遠このかた 子ゆえの廻向  
わたし一人を かたおもい

これはまた岡山に居りました頃、ある六高の学生がたずねて来て、信仰の問題を語り合いましたが、さきほど申しました聖人の御持言、つねの仰せに及びました折、深く考えさせられた結果、私の詠みました俚謡調でございます。前のは「たすけんとおぼしめしたちける本願」のおころを、後のは「親鸞一人がためなりけり」の無倦の大悲を詠まして頂いたつもりなのです。

生死の海、とは、迷いの境涯であります。私共は久遠の昔から、今日唯今にいたるまで、自分自身の縛られている業にひきずられて、迷いの境涯から、更らに迷いの境涯に

古き友

柳瀬留治

古き友の情こもれる手紙など惜しみ持ちしが今日は焼きなむ

八折花  
ふたつうか

情念のきずなに心引かるるは迷ひぞも断ちて安く生きなむ

古き友の便りあらぬ友らいかげせる死に<sup>○</sup>たりしか南無阿弥陀仏

音絶えて独りびとりが消えてゆくこの世淋しも南無阿弥陀仏

世の人等ただ我武者羅に生くるのみ真に人らしく生くるむつかし

とどこほる心の溝の底砂を流す清水ぞわが念仏は

柳瀬劫子

盲となり人の心見え透くと笑みのさびしく甥の語れる

## 池山榮吉

ころげこんで、未来永劫かけて輪廻<sup>りんごわ</sup>からのがれることが出来ないのです。善導大師の「わが身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた常に沈み、常に流転して、<sup>しほら</sup>くも出離の縁あることなし」とは、この自覚であります。

このいつまでもはてしのない、生死流転、六道輪廻の業苦を見るに見かねて、どうでも助けられないではならないと、いのちまでも打込んで、思案に思案をかさね、くふうにくふうをこらされたのが、弥陀の五劫思惟で、そのあげく建てられたのが超世の悲願であります。

聖人は思いを遠く、そのよつて来たる源<sup>もと</sup>に馳せられて、それこそ罪悪深重、煩惱熾盛の衆生、すなわちこの親鸞一人のためであったと、深く深く感佩<sup>かんぱい</sup>せられたのであります。

さて、その学生は「先生、あの弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずればの御文ですね、あれは実<sup>まこと</sup>にありがたく頂けるのですが、親鸞一人がため」とあるのがわかりません。

本願は一切衆生の為めじやないんですか。だのに、なぜ一人がためと云われたのでしょうか」と聞くのです。

そこで、私は「一人がためとあるのは、つまりこの私のため、ということさ」と、軽くうけながそうとしたが、なかなか承服しそうにない。

私はそこに「一体信仰の問題は、これを単に客観的に、もしくは普遍的に、我にも人にも共通のものとして、自分が人の中に立ちまじって居るような、もしくは自分だけ人のかけにすくんで、ひそかに人のしわざを眺めて居るような気持では駄目だ。直接にわが身に引受けて味うことが必要だ。親鸞一人とあるのは、つまりこの感じを強く言われたので、いわば言葉のあやである。例えば白氏文集にも、

「秋来りて唯一人のために長し」などという句があるそうて、大抵ここから思いつかれた言い廻しだろう。意味はやっぱり、この私ということだ」と説明してみました。どうもまだとっくり腑に落ちないらしい。

そこで「一切衆生ことなれる苦を受くるも、ことごとくこれ如来一人の苦なり」とある涅槃経の文を引いて、聖人も、或はこれと照応して、一人と仰ったのではなからうか。これも一つ考うべき点だ」とつけ足した。そして繰返して話し合いましたが、どうにも納得しませんでした。

○ 直接に第一者にむかい、直接に第二者にむかい、直接に第一百者にむかつて居られます。

国家が法律を制定するにあたっては、必ずしも甲某、乙某の利害を眼中におかない。むしろ全体の上から打算して公平で、適宜であると思われるところに従います。即ちこの場合国家の対い合うものは甲某乙某の個人でなく、国民全体、又はその一部であります。これは如来対百人の関係とは、大いにその趣きを異にしてあります。

○ 試みに、私と私の子供との関係を考えて見よう！私には五人の子があります。何だか知らないが、どれもこれも可愛い。長男も可愛いければ次男も、三男も、長女も可愛いければ、次女も可愛い、その間ほとんど甲乙がないようです。従ってその一人の心配は、また私の心配となる。ここにおいて私はおもう、その一人一人と私との関係は親子である。してみれば子というものは可愛いものだ。

ここで一寸注意しなければならぬのは、もしこの子というものを、五人をひつくるめた意味に解すると、子は可愛いものと云うのは、長男が可愛い次男が可愛い乃至次女が可愛いと云う事実から抽象した法則であります。子が可愛いから、五人のものが可愛いのではなくて、五人のものが一人一人可愛いから、子は可愛いものということに帰着

しかし不満足だったのは学生ばかりではなかったのです。私にも自分で何のかのと説明はしながらも、どうもかゆい所へ手のとどかないもどかしさがありました。信仰の問題はわが身の上で受けるのが肝要だ、とはよく云われますが、その我が身に受けると云うことが、なんだかそうでないものをそうと思いなすようにきこえて、ちとわざとらしい感じがします。そこが気になってならなかったのです。私は考えないでは居られなくなりました。その考えの出発点は、涅槃経の「一切衆生異なる苦を受くるも、ことごとくこれ如来一人の苦なり」でありました。

○ ここに百人の人があるとします。その一人一人は、人間として存するかぎり、何かあるのぞみをもっているに違いありません。そののぞみある所に苦はついてまわります。その苦は十人十色、百人百様であります。この一つ一つの苦は当人だけではなく、そのまま如来のここらにも感じられるのです。即ち一人一人ちがった苦は、一つ一つ別々に如来のみ胸につきあたって、如来の苦とならないのはないのです。如来のみ胸にあたるのは百人の苦を一括した総額でもなく、またその平均でもありません。百人がそれぞれ抱えている百様の苦そのままなのであります。如来は百人を一括した一団にむかつて居られるのではな

するのです。

衆生という言葉も、抽象的に解すると、一つ概念であって、如来はこの意味の衆生にむかつていられるのではありませぬ。如来のむかわれるのは、古往今来、およそ生きとし生けるものの個々であります。例えば涅槃経に「如来は一切のために、常に慈父母となりたまえり、まさに知るべし諸の衆生は、皆これ如来の子なり」とあるのにしても、ここに一切と云い、衆生というのには、単にすべての生きとし生けるものなどという概括的の意味ではなくて、一々の衆生の名のかわりに用いられた符徴と見ねばなりません。即ち、甲某であり乙某であり、丙某、乃至この池山榮吉であるのであります。如来対衆生の関係は、衆生全体と如来とをつなぐ一つの線で結びつけられているのではなくて無数の如来対衆生の線でつながれているのであります。

一章の「罪惡深重、煩惱熾盛の衆生をたすけんがための願にてまします」の、その衆生とはこの池山榮吉であつてこの池山榮吉がたすかるのは、他の諸の衆生の助けついでに助けられるのではないのです。こうした事態を言いあらわすために「弥陀の五劫思惟の願よくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり」とあるとしたら、それでもまだどこかに無理があるでしょうか。否これこそ事実そのままを表わされた適切なことばであります。

# 一道会の記

榊原徳草

ここで一寸休憩し、お供えの御菓などいただき、お茶といたし、暫く緊張をほぐして、お茶を頂くことになりました。心のほぐれのざわめきが流れました。

次に、西本宗助先生のお話をうかがいました。

今日は沢山の仏様達がお見えでございます。私高い所からお話申して赤面のいたりであります。自照会の井上善右衛門先生、中井玄英先生もおみえでございます。岡山大学の山田幸先生、そして私の尊敬する龍谷大学真宗学の村上速水先生もお姿をお見受けします。その他に大阪大学の哲学教授の齊藤先生、私のつとめておる産業大学の教授も居られ、なおロンドン大学仏教学教授の稲垣久雄先生もお見えでございます。久振りの御帰国での御出席でございます。そんなことなので、一層高い所からという実感でございます。

なりました。

故郷に帰りましても御感想はどうかと云われます、七十になつたら一寸は静かな気持ちになれるかと思つていましたが、いよいよ我が強くなり、いよいよ偽者になる感じがいたします。偽者というのを一寸言わせて下さい。私の悪い癖は、こういう集りにまいると、一寸有難そうな顔をする（聴衆一同の笑声）。七十になつて感ずるのに本当に喜べないこと。喜ぶべきことをよるこべない。で聖人は、「よろこばぬにて、いよいよ往生は一定」と仰せ下さる。このよろこべない私がいよいよ往生が確かであるという、このことを痛切に感じ、そして、

「汝一心正念にして直に來れ、我れ能く汝を護らん、すべて水火の難に墮することを畏れざれ」

のお言葉がちよつとばかりありがたい、非常にとは云えません、一寸ばかり。

先日、あるその道の学者の方々と会談、ある研究所の方々の会談でしたが、その時この「汝一心正念……」のことが出ました。で私は、池山先生はこれを「オネガヒダカラスグキテオクレヨ」と所謂御左訓されたと申しまして、あらためて有難く思つたことです。その話の時に「水火の難に墮することを畏れざれ」を危い綱渡りだと仰しやる。私はそれで申し添えます。私の先生はこう云われました。

さて今日出かけます時に人が来ていましたが、今から一道会に出なければならぬのでと申しますと、池山先生の会がまだ続いているのですかと申します。この一道会は、池山先生を中心に白井成允先生、我等の先輩の松本解雄師、向島諦宣師等の追憶の会であります。

さきほどは保木俊雄先生が久振りに出席されましたが、私は先般先生の御寺の報恩講に参りまして、先生の申されたように、数年前に胃潰瘍で倒れられ、私を呼ばれたのはこ門徒への最後のお勤めであられたと思うのです。其節お話を承つていて「保木さん、遺言だなあ！」と申したことであります。

保木師と私は昭和四年から七年まで一所でした。下鴨に知四明寮というのがあり、明日は当時の人々が集るのですが、なんとそれが三名で、川畑愛義夫妻と富山の長谷顕性夫妻と私達で、僅か三夫妻。それと羽溪四明（京都女子大教授）であります。私は若いと云われていたのに七十才に

「墮することを畏れざれ」とは、ピクピクするなじやなくて「水火の中へ墮ちこんでいることを恐れざれ」つまり、「何れの行もおよび難き身なれば、とても地獄は一定すみがぞかし」の、地獄に落ちているそのことを恐れざれ、我れ能く汝を護らん、地獄に落ちているなら一緒に落ちてやるぞとのおおせで、このことを思いまして七十になつてありがたく思うでございます。

最後に、木村無相先生、先生と呼ぶと叱られますので、無相さんと呼ばせていただきます。お手紙が来まして、榊原直樹さんから沢山の封緘郵便を送つて下さつたその第一号を書くことができました。直樹さんの弟の弘樹さんには御仲人をさせていただきました。現在東京に居られます。その直樹さんから送られた郵便に無相さんは一杯ギツシリ書いて、非常にありがたいお手紙です。その一番の要点は、聖人のお言葉を引いて「然れば御名を称するに、能く衆生一切の無明を破し、能く衆生一切の志願を満てたまう」このお念仏がありがたい、そういうことが繰返し書いておられます。成程この「御名を称すれば、この西元の無明を破し、能くこの西元一切の志願を満てたまう」のお言葉を、ここへ参る道すがら味わされたことと申します。以上で私の話を終らせていただきます。

次に山田宰先生のお話は次のようでありました。

私毎年この会に参加させて頂いておりますが、今年は稲垣先生もお見えてございますので一寸それに触れた話をさせて頂きましょう。

榊原先生にお目にかかりましたのは今から三十年程前で花田先生のお宅でお話を承ったのでした。その時、煩惱具足の凡夫ということをお聞きし有難く思いました。

私は歎異抄を初めて読んで見ると、何か強く引かれるものがありますと同時に、そのまま受容し難い部分や、何とか抵抗を感じる所があちこちに出てきました。しかも歎異抄で大切といわれる個所ほど抵抗を感じず。例えば第三章の「善人なおもて往生をとぐ、いかにいわんや悪人をや」などでありました。「悪人なお往生す、いわんや善人をや」の方がずっと自然ではないかという疑問を持つ人があると思っております。

悪人成仏こそ真宗のかなめで、罪深く煩惱是足の我等はどんな修行をしても、生死を離れ得ないのを如来はかねて見通して本願をたてられたのであるから、本願に帰して、自分は悪人でしたとなつたのが浄土に生れる因をいただいた身であると説かれています。

然し実際問題として、この真実の行き方が世の中に適用

きに行っていました。始めからこんな疑問をもつて聞いていましたから、このことがわかればお叱りを受けるかも知れない。そうかといつて講話の日がくると休むこともできず、出かけるという状態でありました。

とにかく先生の持つておられるもの、仏から頂いておられる信仰、これが何かを知りたい。もうここまでくれば理屈ではない、実際に持つて居られるもの、これを知りたい。そこを聞き出そう。講話が終るなり先生に挨拶もせずに戻るといふ有様でした。

或時、先生に呼びとめられたので、挨拶もしないからお叱りを受けるに違いない。然しそうであってもその言葉の端々から先生の持つておられるものを伺い知ることができるとも知れない、と思つてみると、先生はそれにも一言もふれず、静かに色々と話して下さるのです。

歎異抄第二章「しかるに念仏よりほかに往生の道をも存知し、また法文等をも知りたるらんとところにくくおほしめしてはんべらんはおおきなるあやまりなり」これこそ私のことである、と思う。念仏より他に何かあるのではないか、これが私の内心の疑いである。しかし親鸞聖人は続けられる。「もししからは南都北嶺にもゆゆきし学生たちおおくおわせられて候なればかの人々にあいたてまつりて往生の要よくよくきかるべきなり」私のようなものは奈良や叡山

するであろうか。一般の人間社会では、むしろ自分のやることは常に正しい方向であることを周囲の人に知らせ、実際に自ら善行を励むことが大切ではないか。我々は不完全な人間であることは否定しない。しかし悪を反省し善に努力が貴いのであって、大切なことは誤りを認め善に向つて一歩でも前進することではないだろうか。もし理想に燃えた青年が、真宗に愛想をつかしキリスト教などに共感を抱くのは、こんな所に原因があるのでなからうか。これは実際に私自身が持つた疑問でありました。

善人の道を進んでみますと、フイヒテは「ドイツ国民に告ぐ」の中で「人間の性が本来悪に満ちたものであるという考えを人々に植えつけるほど排撃すべきことはない、人間は本来善を認識する能力を持つている。この芽を育て、善の中に喜びを見出すことが教育の使命である」と。また山上の垂訓の中に「心のきよきものはさいわいなり、その人は神を見得べければなり」、それは善行が何かによって報いられるというのでなく、善行そのものの中に限りない神の愛があると説いています。世の中に広く眼を向けねばならない、真宗以外にも立派な宗教が沢山ある。こんなことを考へて、時には真宗からきっぱり離れて新しい世界に入つて見ようと考へたこともありました。

当時、私は名古屋の西別院で、花田先生の日曜講話を聞

へ行つて学者達に会つて、よく聞かれるがよい、と言われる。そう言われる御様子をお聞きすると、皮肉を言つておられるのでなく、そう忠告して下さつておられるようである。嘘を、言つておられないようである。

では私はその忠告に従つて奈良や叡山へ行つて見るより仕方がない、聖人のもとを辞して、とほとほと奈良の方へ歩き出して行く。

聖人は「親鸞におきては、唯念仏して弥陀に助けられまいらべしと、よき人の仰せをかうむりて信するより他に別の子細なきなり」と云われる。この聖人には、遂に自分は捨てられるより他ない身である、自分はまことに雑行捨て難く「いかにいかに学問して」ゆくより外に仕方がない者であると思つて見ると、何か急に楽になつてきた。

自分は賢善精進の道歩むより外ない者で、唯円大徳に歎異されるよりほかない者と思つてみると、返つて落着いた気持ちになつたのであります。

ある日、たまたま教行信証の総序を拝読していると「大聖一代の教、この徳海にしくはなし。穢を捨て浄をねがい」のところ、これこそ自分のことであると気づいて、今までもや／＼していたものが急に晴々としてきました。穢について抜け出せない身だからこそ浄をねがわずにおれない、善人たらんと騒いでいるのは悪でしかあり得ないか

らそう言っているので、善人でありたい、善人顔をしたい、これが自分の業であった。同じものをただ違った角度で見ているだけで、人間が善とか悪とか云っているのは、仏の眼から見られると大した違いはないことであつた。

我々のこの様な姿をすてにお見抜きになつて「善悪淨穢なく」「善悪の人をえらばれず」すべてを救わずばやまれぬ仏の本願であつたのであります。

さてこのような自分の姿が知らされてみても、やはり善人顔は仲々直らない、人に対して「まこと」だとか「誠意」だとか、自力作善的行為が時々顔を出す。聖人は「小慈小悲もなき身にて、有情利益はおもうまじ」と、ただ専修念仏の道を歩まれた。然るに私は、小慈小悲に迷ひ続けている。法然上人の御坊の床の下に忍び入つた耳四郎が上人の説法を聞いて、翻然として念仏する身となつたが、その後盗賊癖がやまなかつたと言ひ伝えられているのは、善人顔のやまない自分にとつて誠に身に沁みて有難い。

○ 先日ドイツでフランクフルトから列車に乗つたのですが、その直前にドイツ人夫妻が乗つてきました。何でも休暇を送つていたらしいのですが、その夫妻が言い争つている。聞いてみると、離ればなれになつて休暇を過していた二人が、時間を打合せていたらしい。それが片方が先に着いて

## 去りにしものは哀しきかな

——わが弟へたむける鎮魂のうた——

それは誤診だつた

今日は君の十八回忌、君のいないこの世の中をかなしく淋しいものと思う。

生前、二人しかいない兄弟、どちらが先だつたらうか、いずれにしても後に残つたものが悲しい思いをしなければならぬと語り合つたものだつた。そして若い君が先に遠いところへ去つていき、ぼくが今別離のはかなさをしみじみと思わねばならないことになつてしまつた。それがどれほど歎かましいことか、今分つてくれるものさえない。とはいつてもやはり君がそんなに早く去つてしまふなんてやりきれない痛恨をおぼえる。

君が某大学医学部の付属病院に入院してからは、特別といわれるほど慎重な検査と診断がつづけられた。君はその教授だつたわけだから医師たちも念には念をいれて診療

待つていた、そこへやつと来てどうにか汽車に間にあつた。そこで、お前が悪い、貴方が悪いと延々一時間もやつている。いかにもドイツ人らしいと思つた。

ベルリンに着いてバスに乗りますと、夫々に車掌の前にチケットを出します。ワンマンカーです。それが「私は間違ひなく、これを持って乗っている、正しいのだ」といつた態度が強く示されている。日本人のように、一寸見せて行くのでなく、自分は不正を働いていない、正しいのだ、と、いかにもドイツ人らしいと思つたのです。然しこの姿を見た時フト自分の姿を思つた、俺が俺がという我慢のやまない自分を想うのであります。それにつけ、ドイツ人もお念仏を喜ぶ道があると念じてるのであります。

稲垣先生がロンドンに居られて、仏教を教えていられ、欧州の人々にも真宗を喜ぶ空気が、その道が開けたと聞きますが、ベルリルの真宗会の人々は池山先生のドイツ語訳の歎異抄を読んだのがきっかけになりました。先生の独訳は先生の体験から訳が出来て居りまして、独特な味があります。それでもドイツ人はこれが難解であると申しております。

## 川畑愛義

には最善がつくされた。

それでも君は、これら同僚たちの診断を承服しなかつた。端的にいうと、それらは皆「誤診」だとかたくなに主張した。そしてすべての治療薬の服用を拒否した。君はこれらの投薬をすてる専用のごみ箱を備えつけさせたほどだつたね。

ただ、君自身、体内の病気が何であるかは判断できなかつた。何だか分らないが、この医師グループの診断も治療も間ちがつていると確信したね。これほどの悲しい受難がまたとあるらうか。ぼくは兄として君のいらだちやら歎きを生前十分思いやれなかつたことを今切実に後悔している。ただ一つぼくの弁解をきいてくれるならば、大学病院の専門医たちの医療技術を過信したのが悪かつたのだな。君があればほど不信をつづけていたのに、他の病院に移すなり、他の権威たちにも診てもらふべきだつた。このことは

あれから十幾年

今いくら悔いても悔いてもまだ足りないような気がする

某大病院の内科教授は、最近こんなことをいったよ。「誤診でさえなければ、弟さんは今頃元気で生きていたかも知れないのにね」と。

そのようなことをきくと、いつそうなきげなく思うけど、本当にぼくが失神するくらいがっくりしたのは、剖検が進み、君の心臓をメスで切り開いた時だった。生前多くの教授たちが精密検診したが、誰一人として、この「心臓粘液腫」を考えた医師はいなかったからだ。

君が自身医師として、このような誤診を看破したのはさすがだと思うが、それにしてもその病態をつきとめられなかったのは仕方ないことだろうか。いずれにしても、どれほどくやんでも、あやまつても、わびても、もう追いつかないんだから、かんにんして許してほしい。

現代の医学者や医師たちは、患者の生命のまえにさらに畏敬の念と慎重な姿勢を示してほしいものと願う。医者ほど直接的に人の生命を握っているものはないからである。「医師と誤診」これは世間で考えているより、もっともつと多いのではなからうか。真の名医ほどへり下つて考えて

悔多い 生命を ここに 鎮むるや

ここにアメリカの近代の名医として仰がれたW・オスラ  
一教授のいったという臨床医への願いを思い起こす。

「医者は自らの人格のために毎夜寝る前に三十分間バイブルを読んでほしい」と。

また、医聖ヒポクラテスは、その著医道の「原則篇」のなかに、

「医術はあらゆる術の中の最も高尚なものである。しかし今やはるかにその他の術の下位に立っている。それは、半ばこれに従事する者の未熟なため、半ばかような輩（ともがら）を識別する者の浅はかさによるものである。」  
といつて警告しています。

まことにふつつかながらたどらしい鎮魂の歌をつづつてみることにした。汗顔のいたりにたえないものであるが

はらからの死に憶う

野をゆけば家に帰ればおもかげの

まぶたに見ゆる いとげなき日よ

母のゐて栗飯炊きし山のへの

いるようで、診断の約二割は間違っているであろうと東大某内科教授はいったことがある。すると患者五人に一人があやまつた診断を下され、したがってよくない治療を受けていることになる。君の場合でも、剖検をしなければ誰も誤診なんて思いもよらなかつたはずだ。

医師をえらぶ権利は患者に

それにしても、みんなで自分の健康は自分で守る決意と態度（姿勢）を保持してほしいものと念じてやまない。そして、そのために、平常から健康管理の注意と努力をしてほしいものである。最後に医師をえらぶ権利は患者の側にあることも忘れてはならない。

こういえば、医師の一人として、現代の医学や医師らに對して不信を強くもっているかといえれば決してそうではない。先日NHK第一ラジオの「人生読本」のなかで長友高橋希人氏は、半生を貧しきもの、病めるもの、悩めるもののためにささげつくした庵政三医師の話をしていられた。この放送を聞きながら感動に胸をつまらせたのは私一人ではなかつたであらう。

何はともあれ、君の辞世の句は君の墓標にきざまれ、ひそやかに君のなげきを世の人々に訴えつづけているよ。

茅ぶきの家 思ほゆるかも

木にのぼり柿を食みつつ語りける

幼きころの 夢あはきかな

葉をつけし毬栗の枝をもちつづぞ

山路おりたる 夕焼の色

こし方の年月思ふふるさととは

人ら住まはず田の荒るるとふ

いかばかり辛くありけん 若妻に

悩みもつ子の後を托して

明日という日のあるものを ひとりたび

声きかせてよ風のなかより

ほとほとに消ぬべき人だも承らへて

わが弟は死にはてにけり

ともかくも誤診なるよとくすし（医師）らの

薬をとらず期（とき）に對入り



手ずから脈をはかりて臨終を

告げるときに息たえましぬ

はらからの割検（ふはけ）をせんとメスの刃の

光るをみつつ時（とき）はながれず

あなあはれメスもて内腑ひらかれて

体腔早やも空しくなりぬ

台上のふはけすすみて心臓の

割かれしときに誤診定まりぬ

わが弟を子さえ母さえ誤診せし

医学の道のはろかなるかな

東山大谷廟のほとりなるおくつきどころ

定め来にけり

はらからのえにし喜ばんみ仏の悲願の

なかに生きにけるもの

回忌の日に

泉より清水汲みては献げけり おおはんごん草の

## 自照日誌抄（20）

——背後から——

お念仏申して身に泌みてありがたいこと、それはお念仏申せば、如来さまが直き直きにわが煩惱具足の身に顕われ給うからである。それは、なんともいえず有難い。そのことを深く気づかせて下さったのは善友、玉城康四郎先生。

じつは「在家仏教」三月号の巻頭に『仏教の冥想』と題する玉城さんの玉文を見出し、久々、拝読して心うたれる。というのは、先生の「冥想」といわれることが、わたしのような下根の凡夫には、お念仏として、み仏の方から用意されてあることを教えられたから、殊に「われらの無明そのものにこそ、仏の命が顕わになってくる」（略）「無明そのままが仏の命に摂取されてあればこそ、いよいよ頭は垂れてくる。頭が垂れば垂れていくほどに、仏のおん命は充溢してくる」のくだりはありがたい。

二月十八日（月）東山の岡崎別院で奉行された大谷尊

咲きつぐ朝な

面影を偲ぶよしなし逝きし夏の杉生の

下のつゆくさの花

霊となり彷徨らんか上弦の月に漂よふ

雲の幽けさ

ここを去る十万億土（浄土のこと）にたまゆら

わがはらからに会はむすべなき

あかあかと紅蜀葵の花もえいでて

未だも吾は死なずありけり

（以上の短歌のうち一部本誌に掲載済みのもある、

乞御諒承）

筆者

## 西元宗助

修学院の信国淳院長の追弔告別式に参列する。本堂いっばいに参列者が溢れ、遅参した私は係りに案内されて、東昇氏の傍に漸く席を見出す。

信国さんは戦前は大谷大学のフランス語の教授。そのころ池田榮吉先生に遇われて、本願念仏の世界にめざめ、戦後の後半生の二十余年を専修学院に捧げられた方。すなわち師は、学院は真の院長は阿弥陀如来にましますという自覚をもって、如来の教法を同僚の教師並びに院生と共に仰ぎ、ことに院生と寝食を共にしようと心がけられた。すくなくとも、学院の食事の準備は、院長と教職員とで交替になされた。そのことの一端は、同師の『いのちは誰のものか』（東京・柏樹社刊二千五百円）にもうかがうことが出来る。

なお同師の最後の遺言（遺年七十五才）は、（一）一緒に念仏しましょう」であったと。告別式における最後の竹

中智秀氏の挨拶は、右のご遺言を伝えて、ご一緒にお念仏を高らかに唱えたい、であったことは、まことに感銘が深い。けだし大谷派は、教学は盛んではあるが、お念仏をあまり申さない風があるだけに。

○ Y君が六年目に漸く大学を卒業することになった。そのY君の打明け話によると、両親が夫婦別れして自分は父のほうに付いた。それも母に男が出来たため。しかしこんどは父に女が出来て、それからというもの天涯孤独。幸い同和奨学資金をもらい、アルバイトもして生活費をかせぎ、漸くここまでこぎつけましたという。それもM先生のお蔭と、少し明るい顔をする。

M先生とは、R高校の校長先生であり、宝善薩院のご住職。私の最も畏敬する宗教者、教育者のお一人であられる。君は最上の先生にあえて幸せだナ、と随喜して云いながら、ところで、どんなアルバイトをと訊ねると、電線屋だと、いう。

彼の説明によると、電線屋というのは、時には五十米以上もある高い鉄塔や電柱に昇って配線の仕事をする。高圧線はあるし、非常に危険で、この三、四年のあいだに仲間のもの数名が、目の前で落ちて死んだという。殊に冬季の停電の場合など、夜間に電柱の頂上まで昇って零下何度の

ムアマミタブツのおたよりをいただきました。耳も一層遠くなり、目も白内障で半盲になられたとのこと、おいたわしく存じます。でも、御文字、躍動しているようで、目をみはるような美しい筆跡。わたし、ひそかに南無々と応答し奉る。

そう申せば、アメリカはバークレイの松浦忍刀自からのお便り絶えて四カ月、よほどお弱りのことかと昨今案じ、念じることでございます。たしかお年、八十三才の筈。

わたしごとながら嬉しいことも、ちよつぱり書かせていただきます。末の娘が、仏縁深く、お嫁にまいることになりました。なにかと心いそがしい家内のいうのに、お父ちゃん、面白そうな晩年がまいりますと。それで私、ウン、おかげさまでと。

最後に例によって榎本榮一さんから送られた仏さまの詩を一つ、

### 背後から

気がつけば

寒風の夜空で仕事をするとき、ホントに命がけ、一日一万五千円の賃金を貰えるけど、このあいだも、相棒がアツというまもなく墜落死しました。こんなときは、十日ほどは眠れませんか。

「命綱（いのちずな）はつけているんだらうな」と確めると、命綱はもちろん身につけていますが、電柱から電柱に移動するときは、その命綱をほどかなければならない、そのときが危いのです。しかも相棒が墜死したとなると、お前が突き落したのではないかと、しつこく取調べられるのです。われら「部落」のものとは、暗くつぶやく。わたしは胸がしめつけられるようであった。

ちなみに彼は大学卒業と同時に、前記M先生のもとで得度し、仏道修行に打ち込むという。わたしはその前途を深く念じて堅く堅く握手する。

○ この三月で二回目の定年退職を迎える。（但し、あと一年は各員教授という名目で講義だけ少し担当）こうして段々、店仕舞いがはじまります。しかしお陰さまで、もう少し仕事は出来そう。願わくば、つづつ（ま）やかに暮したいものでございます。

ここまで書きしるしましたところに、それこそ天から舞い落んだ蓮の花びらのように、和上苑の無相さんから、十

背後から射してくる

仄かな御ひかりが

あの光背のように私をつつみ

娑婆の縁いまだ尽きず

### 一茶、父の終焉日記の余白

兄弟二人、親の病氣見舞に來りけるに、一人は道近ければ早く立ちけれども、暮れたれば前後も見えず。道に塚穴ありければ、屈み居て明るを待ちける。

然るに一人は道遠くしてあとから來りけるより、その穴に落ちけるに、先に入りたる子は、鬼來りて我を喰わんとすらんと防ぎ、あとから來れる子は、穴に鬼ありて我をあやめんむかと、互に摺みあいけるに、夜明て見れば兄弟なり。生死の間に迷いおれば、皆無明の鬼なるべし。

念仏詩抄

木村無相

その証拠(しようこ)が

香師おおせに

香師||香樹院徳龍師

参るわが姿は

仏の見たもうなり

称うる念仏も

聞いておわすなり

心で思えば

仏いよいよ我れらを

あわれにおぼしめし

はなれとも

はなれぬことになる”

その証拠が

今のナミアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

これよりほかには

なんにもない

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

よく聞けよく聞け

香師おおせに

”水はわずかなり

火のいきおいさかんれば

ながく消えはせぬ

邪見やウタガイのいきおいは

さかんなり

聴聞はわずかなり

なかなかウタガイはれよう

道理なし

よく聞け、よく聞けと

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

よくよく聞くと

香師おおせに

”耳に聞いたこと

心の底におちつくまで

よくよく聞かねば

ならぬ——”

よくよく聞くと

ナムアミダブツ

おおせられぬ”

よく聞け よく聞けと

よく聞け よく聞けと

おおせられる

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

ナムアミダブツ

仏法のイノチとは

香師おおせに

”仏法のイノチとは

如来の教えを

何から何まで

わが身にひきうけて

信ずるが

仏法のイノチなり”

わが身のための仏法なり

わが身のための教えなり  
何から何まで  
わが身 わが身と  
わが身にひき受けて  
聞くほかはない

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

されば――

香師おおせに

「あらゆる罪を

入れておくものが

人間のカラダなり

思えば思うほど

おそろしきは

この身なり――」

聖人のおおせに

## 本願に生かされて

不可思議の弥陀のちかいのなかりせば

何をこの世のおもい出とせむ

と良寛師は詠じているが、これこそ本願をきき、本願に生かされる者の喜びをたたえたものであろう。言葉をかえて云えば、本願を聞信してそこに人界に生をうけた甲斐があったとのよろこびである。

さて人それぞれに願いをもって生活していて、毎日々々忙しい／＼で怒々として過ごしているが、そのほとんどが有形無形の煩惱満足のためである。然し無限の煩惱をもつ我々は、底の抜けた槽に水を汲むのと同様に、何時までやっても、何処をたずねても満足というときはなく、たまに苦心して得たものも、壊れたり、奪われたりして、不安と不満と焦慮が限りなく続く。

こうした人生の旅にあつて、衷心からの願ひ、それ一つによりかかっているものを失う時、失望落胆のはては明白

「さればそくばくの業を  
もちける身にありけるを  
助けんとおぼしめしたちける  
本願のかたじけなさよ――」

されば――  
されば――  
されば

ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ  
ナムアミダブツ

草枕より

夏目漱石

智に働けば角が立つ。情に棹させば流される。意地を通せば窮屈だ。  
とかく人の世は住みにくい、住みにくさが高じると安い所へ引き越したくなる。どこへ越しても住みにくいと悟った時、詩が生れ、画が出来る。

花田正夫

のへ希望を失って、生ける屍となる。

かく自分のよるべを失うと、人間以上のちからを持った神、仏に祈願して、その力によって生きようとするが、そうした自分に都合のよい神・仏が実在するであろうか、そしてはたして自分の願ひがかなえて貰えるのであろうか。それらは自分の願ひがつくり出した一つの幻像にすぎないのでなからうか。疑いの強い私共はどうも容易に信じられないが、溺れる者は藁をも掴むの道理で、その如何を問う暇もなく、それにしがみつく。するとすこしは気やすめとなり、そのうちに、禍福はあぎなえる縄で、一寸都合がよいと、お蔭様でと喜び、そうでないかと反対に神も仏もあるものかとなつて崩壊する。

敗戦後間のない頃、友人の寺の報恩講に招かれた。その時、寺の総代をしている人が座敷に来て、半ばひとりごとのように、なかば訴えるように語り出した。

「本当に神や仏はあるのでしょうか、寺の総代をして長年

きました。どうもわからなくなりました。というの私の長男は、大学を出るとすぐ上海の上陸作戦に参加し、間もなく戦死し、次男は北満で敗戦となり、そのままソ連に補虜として今も抑留中です。敗戦の時、戦死者の家族に心配のないようにするというお上からの放送があったが、政府は一体何もしてくれません。世の中は真暗です。神も仏もあると思えません……」

と苦衷を訴えられた。そこで、「尤もです、今のあなたには神も仏もないでしょう」と云うと、すぐさま「あなたは僧侶なのに仏はないと云うのですか」と問いなおされるので「いや、ちがう。あなたが拝んでいた神・仏がないというのです。それは貴方に都合のよい神・仏で他人には迷惑になるものです。貴方の子供さんの打つ弾は相手に命中しても、自分の子にはあたらずに神・仏を拝んだのでしよう。そういう神仏があれば世間に害になります……」と説明すると、冥目して聞いていたその人が「それでは本當の仏様とはどういう方ですか、それを教えて下さい」となつて、真剣に談合したことがあつた。

稲葉田成師の随想に「東京で明治神宮にお参りしたら、沢山の参拝者があつたので感心して、懇意な人に話すと、いやあの多くは勝負師で、明治天皇の時代、戦えば勝つたので、勝負に強くなるために参詣しているのだとこのことで、

子となつたのである。そこでマッサージをする看護婦さんに、「あなたは病氣じやないの、歩くことを忘れただけよ、早く思い出して優しいお母さんのところへ行きましょ」と子供が聞いていてもいなくても何度もくくりかえして歌のように唱えさせた。

何日かすぎた或日、フト見ると子供がベットの囲いにかけて起きあがろうとしはじめた。こうなれば療養も易いのでほどなく立ちあがり、母の胸に抱かれたと、昔ラジオで報道された。

私はこれを聞きながら、この歩けない子供の上に、種々の煩惱にしばられて身動き出来ぬ自分をそこには見出し、この者に、倦むことなく休む時なく、よき人をおしてそそがれる仏心のまことがしみておつて信心の花がひらき、念仏とあらわれて下さるのであります。

金剛堅固の信心の 定まる時をまち得てぞ、  
弥陀の心光照護して ながく生死をへだてける  
弥陀仏はそのことを待ちに待つて下さるのである。

又、今現に念仏をよろこんでいられる岡山の愛生園の人から、先年「一すぢの光」の題の原稿を貰つたが、ハンセン氏病になつても「若いから治る」と父に励まされて入園したが、突然視神経を冒されて失明の身となり、父の言葉

開いた口がふさがらなかつた」とある。

さて仏陀は、私共煩惱具足の凡夫の故に、生死の苦海のほとりないことを知り尽くされ、しかも煩惱具足の身に、悉く仏性ありとみそなわし、しかもその仏性を悟顯する力もないと、煩惱の底までを見透された上に、こうした苦惱の私共を成仏せしめようと切なる本願を發起して下さり、それを達成するでたと力とを成就して下さつたのである。

この仏力を私共にとどけその加威力で不可能を可能化させようために、十方諸仏とあらわれて、弥陀仏のお力を讚歎して、具体的には三国七高僧となつてくりかえしまきかえし伝え続けて下さるのである。点滴岩をも穿つの道理で、この大悲うむことのない善巧の力で、仏心のまことが私共に徹して下さるのである。

九大の心療内科に、或親が歩行の出来なくなつた子供を連れて行つた。種々検査しても別に悪いところはない、そこで母の絵を描かすと、角の生えた女の顔を描いた。そこで、幼い時からの話をきくと、次の子が生れて間もなく歩けなくなつた。その頃、次の子が弱かつたのであの方にかかりはてていたとのであつた。これ原因は判然とした、自分をかまつて貰えない淋しさから、歩かなくなり、すると母が抱いてくれることを覚え、そのまんま、動けぬも信ぜられなくなり、生きる力も、死ぬことも出来ぬといふ絶体絶命の立場にあつて、はじめて、母の慈愛の涙がとどき、自分では生きることが死ぬことも出来ないのに、その中に注ぎこまれる母の願いが唯一の光明となつて、母の願ひにしたがつて生きる道がひらけたのである。

私共もこの患者と同じなので、内に外にあらゆる努力の甲斐もなく、はてしない無明の深夜の苦海に沈みきつて浮かぶ瀬のない身にそそがれる大慈大悲の本願に生かされる道がひらかれる。

生かされて生くばかりなりみ仏の  
深き誓のあるにまかせて

とは、四十六歳の時、心筋障害で蓬戸不出の身になつた時、思はずつぶやいた私の腰折である。自分自身には八方塞がりの身にかけられた弥陀仏の本願、この煩惱の身を成仏せしめうるとの仏の願力を、我が身一つに頂いて、そこに不思議にも仏力による自然のめぐみを仰いで、現生無上の利益を頂いている。

御 紹 介

常 照 松村繁雄遺稿集

申込所 山口市仁保上郷三三三 山本永一  
定 価 七〇〇円、送料、二〇〇円也

## あとがき

四月になり、花祭りの行事が、誕生仏を中心に随所で催されたことでありましよう。卒業や入学で若い人々の希望に燃えた姿もほほえましい限りであります。

然し本年になって、京都で専修学院の信国院長が亡くなり、次いで、市内では早瀬金之助さん、谷田千代さん、県下では稲波治三郎さんと、次々に訃を知らされました。謹んでお悔み申し上げます。

西元さんが、ボツボツ店仕舞をとしきりに申されますが、私にも切実な問題となりました。同年の木村無相さんは生前に葬いをすませ、死体は大学の解剖に送り、遺骨は京都の浄住寺さんにお願ひされたと聞きます。和上苑を浄土の次の部屋ときめての生活、

生きながら死人になりてなりはてて、思いのままになすわざのよき

という古歌を謹んで呈しました。とは申すもののこの肉身のある限り、病苦や求不可得の苦も続きますことで、矢張り「生死の苦海はほとりなし」であります。

さて本月は、川畑愛義さんが、御令弟の愛浩さんの十八回忌に、切々とした愛別の悲しみを書いて下さいました。お二人は私

共から羨やましがられる程、仲の良いお兄弟で、愛義さんが念仏されるようになること、愛浩さんも熱心な念仏者と転じられました。しかも職業も医学を共に修められた人でした。ありし日の思出もありありと浮かび、愛義さんの哀しみをお察し申しました。

西元さんの日誌抄に、信国さんの学院葬に出席せられ、竹中師の告別の辞に「一緒に念仏申しましょう」が信国師の御遺言であつたとのこと、強く心にしみますことで。善導大師が、道綽禪師の考えをうけられて「称名の念仏」を當時の中国の仏教界のきびしい批判の中で専心提唱せられ、法然聖人がこれをうけられて「専修念仏」の門を開かれ、親鸞聖人が「念仏成仏」の道を「ただ念仏して」と伝承して下さいました。法水の流れの遠く深いことを、あらためて渴仰申しました。

## お案内

五月二十五日午後一時、岡崎一道会開催所、岡崎市大西字下西、杉浦豊氏宅  
人、榊原徳草師、保木俊雄師、花田正夫師

## △御案内▽

- 毎月第一、第三日曜、午後一時半、一道会例会。一道会館の南隣り
- 南区駆上町二の八六。鬼頭康彦氏宅
- 市バス、新郊通り一丁目下車、東入ル三筋目、角
- 地下鉄、新瑞橋終点下車。
- 教西寺、法話会。昭和区小桜町二丁目四
- 毎月二十四日、午前・午後。
- 市バス、御器所通り。又は北山下車。
- 地下鉄、御器所通り下車。
- 蓮光寺修道会。毎月七日午後一時半
- (但し日曜を除く)尾西市三条板倉
- 名鉄新一宮駅よりバス、西三条下車。

定 価 半 年 七〇〇円(送共)

一 年 一四〇〇円(送共)

編 集・発 行 人 花 田 正 夫

電 話 八二二局七〇三七番  
愛知県西加茂郡三好町大字福谷

刷 人 坂 部 光 雄  
名古屋市南区駆上町二ノ八八

発 行 所 慈 光 社  
振替口座 名古屋 一〇四七〇番  
郵便番号 四五七